

子どもの絵あれこれ（下）

川崎 千束

加藤周一著の『羊の歌』に、

「子どもの私はその小さな旅行を待ちのぞみこの上もない楽しみとしていた。汽車が荒川の鉄橋を越えるときに、私のもうひとつの世界がはじまる。鉄橋を渡る車輪の規則的な音が俄かに高まり、私はいつもの生活の時間表から、そのとき、決定的に解放されるのを感じた。私が今離陸したばかりの旅客機の中で味う感覚は、小さい私の荒川鉄橋の感覚と少しもちがわない。」

私も、右の記述と同じような解放感を、最初の外国旅行の機中で味わいました。

家庭生活から、職場からの解放感は、新たなエネルギーとなって、「さあ、新しい生活

がはじまる。」と、むくくと湧く雲海のように希望が湧きました。

私の幼稚園生活が楽しくなかったのは、この解放感のなかったことで、制御されたプログラムで、朝の会集から降園まで、羊の群れのような生活態でした。こんな退屈な生活が幼児期にあってはならない。楽しくいきいきとした園にしたいと強く念願しました。そんな園なら、イマジネーションも、夢見る思いも培われ、描く絵も情感ゆたかなものになる。……と。

『銀の匙』の前篇に記されている伝馬町の牢屋あとの見世物や露店の様子を読んでいくうちに、私の幼い日の観音様のお会式えしきがなつかしく回想され、大好きだったミタラシ団子や肉桂棒の味さえ甦よみがえってきました。覗きカラクリ、天勝のマジック、猿芝居、バナナの叩き売りの真似をしたりなど、幼稚園以外の友だちとの遊びは楽しく遊び呆ける程でした。私の郷里の祭りは、山車だしも出るので、稽古の笛太鼓の音が、きこえ始めると胸ときめかして、祭りの日を指折り数えて待ちました。

『銀の匙』の後篇の小林寺の境内で貞ちゃんまことと遊んだ自由な天地の描写。蟬とりにうき身をやつしたり、凧あげ、栗ひろい柿もぎ。それらは、私の子どもたちとその友だちとの田舎生活で、季節毎に繰り展ひらげた遊びの姿そのものです。読み了って溜息が出ました。私が接している子どもたちは、ここに記された○○君のような、或は私の幼時期のような自由で楽しい遊び、心奥から喜びの湧く経験をしているであろうか。……と。

〇〇君の伯母さんがベビーシッターから家庭教師の務めまでこなし、且つユーモリストで「四天王か」「清正か」と山崎合戦を真似て〇〇君ときり結び、わざと負けて、「繩はゆるせ、首切れ。」の台詞。或は大日様のおみくじを有難がる信心深さ。木の実、どち遊び。菊毛氈きくもつくり。笛太鼓の素養から淨瑠璃に至るジャンルの多様さ。空箱に握り飯をつめ、庭の築山をぐるぐるまわり歩いたあげく、石灯籠の前で拍手をうって、お伊勢詣りの趣向などとイマジネーションも豊か。この伯母さんの親身の薫育によって、至高の芸術魂を持ち、正義感強く、繊細な暖かみもある〇〇君の人間が形成されているのです。

子どもたちの生活をマンネリ化させず、楽しみを待つ心を味わせ、好奇心で物事に対するようにしたいと強く希いながら、私はこの伯母さんとは比較にならず、自分の浅学菲才を如何にせんと嘆きがつるばかりでしたが。

寺田寅彦はその随筆に

「水素と酸素の混合物は常温常在では殆ど全く化合しないと云ってよい。然るに白金か、パラディウムの極めて微細な粉末状になったものを、この混合瓦斯中に入れると、それが媒介となって接触作用によって、酸素と水素が化合した水を生ずる。触媒は何も白金のよいうな貴金属とは限らない。ニッケルの粉が使われることもあり、場合によってガラスや炭の粉や土壌のようなものでも触媒の用をつとめる。」

私にだって触媒としてのガラスや炭の粉ぐらいの役目はできる。

辛いなことに、当時の家政大のキャンパスは自然が豊かでした。五百本を数える樅・樫の大樹。秋にはどんぐりや椎の実ひろいをし、枯枝を集めて七厘で火をおこし椎の実を煎って、皆でたべる格別な美味。キャンパスは枳殻垣をめぐらしているのです、その葉に巣くう青虫を飼育し、何回となく黄あばはに羽化する瞬間を息をつめて見詰め、蛙の卵が育つ浅い池は冬季は氷がはりつめて、子どもたちは氷とりに夢中になれる。よもぎを摘んで草団子をつくったり、落葉を集めて焚火をし、中に薯を埋めて焼けるのを待つ期待感を味わい、あり余るハコベは十姉妹の餌に。用務員が蟻蛙を見つけてくれたり、この自然環境は東京一だと自負したものでした。

園舎外というだけで子どもたちも教師も解放感を覚える園外保育を多くしました。早朝の明治神宮。玉砂利をふむ音にさえ神祕の気配を感じ、常夜燈が一つずつ消されてゆく情景。火焰太鼓の合図に神官が揃って礼拝後、まめまめしい掃除ぶりに好奇の目を輝かせた夕方の内苑。冬には神宮の森を晦としてゐる鳥が鳴き交しながら群れをなして帰ってきて、三十分もたつと枝々に吊し柿のような格好になって静まりかえります。ゴルフ場にならない以前の秋ヶ瀬に、「雨蛙が沢山いる。」と教えられて雨蛙とりに。素早く逃げる雨蛙を追っかけ歓声をあげて喜びました。野川へザリガニとりにも行きました。高麗のキンチャク田へれんげを摘みに行き、田螺を見つけて持ち帰り水槽に入れておいたら、「粒々

ができた。」と騒ぐので、見ると貝に小さい粒々が数個附着しているのです。田螺は胎生

なので、「これ赤ちゃんよ。」と教えたら大変興味を持ちました。

葉山の芝崎海岸まで遠出もしました。都立両国高校の好意で、新座市にある同校の運動場へ毎年虫捕りに。農薬を使用していないので、草丈は膝を没するほど伸びていて、その中で虫と一緒に跳びはねたり、果ては鬼ごっこになったりして、楽しい冒険をしているようです。晴海埠頭で、停泊中の捕鯨船や商船大学の練習船に乗せてもらった喜びもあって、学校以外の方々の方々の幼い者への温かい配慮に感激したのも園外保育のおかげでした。又、子どもたちの敏感でゆたかな感性を改めて識ることができました。

年長組になってから、既成の紙芝居はやめて、私が感銘した絵本を読みかかせました。冒頭に記したペンギンの話もその一つで、省略したり、理解し難いところは私の言葉で補いはしましたが、なるべく原文に忠実にしました。ケストナーの動物会議は、地球上の動物たちが、会議に集合するのに、どんな方法で会場にかけつけたかを中心に、問答しながら読みました。アンデルセンの絵のない絵本。世界の民話集。谷川俊太郎の詩など。

幻灯機を利用して、色セロハンを駆使しての影絵作りは、時間を忘れるほど没頭しました。(・はなをくんくん。・ぐりとぐら。・蛙の家さかし。・小さいうち。・のろまなローラー。・十一匹の猫。・園外保育で体験したことなどが好材料になり、子どもの手になったと思えぬほど美しい映像になりました)

五月のある午後。母親たちが連れ立って幼稚園にあらわれました。

「今日は小学校の参観でした。子どもたちの絵が貼り出されていて、大抵は漫画の模倣だったり、類型的な絵の中でこの幼稚園の卒業生のは、それ／＼個性的で、名前を確かめなくても、すぐ判りました。」

このことを先生に報告したくて。」

子どもの絵に関して、私は木霊の峰の麓にたどりついたような安堵感を覚えました。

子どもたちが、心が高まった時、又は友達同志で楽しく話し合いながら描いた絵はのびやかで、その子の息吹きを感じられます。

津守先生は、描画を心理的発達の立場から研究の蓄積を講義され、子どもの心奥の深さを微妙なニュアンスを教えてくださいました。

最近、世界児童画展が開催され、その批評の一つに「日本のあるものは、技術はすぐれているが、イメージーションに乏しい。」と。

三十年近い昔に、私が耳にしたのと同じ言葉を聞きました。

風もないのに、絶え間なくハラハラと散る桜を私は長い間ぼんやりと見上げていました。

引用した本、

・ 幼児の描画指導（レニングラードの幼稚園の実践記録）

- ・中勘助（銀の匙）
- ・加藤周一（羊の歌）
- ・倉橋惣三（園丁雑感）
- ・寺田寅彦（触媒）

△註▽

思うままに園外保育ができたのは、園児数が少ないので、観光バスを使用せず、国電・地下鉄・路線バスを気軽に使用した為。（現在のようなきびしい交通事情でなく）山下園長の先生が、実践に関して何の干渉もされなかった。

——完——

（元東京家政大学附属幼稚園）

